

図書館資料の蔵置形態とその分化¹⁾

小 倉 親 雄

1

図書館に収集されて来た資料が、次第に大きな蔵書を構成するようになると、その間にいろいろな分化現象が付随して来る。この形態は歴史的にも、また欧米2つの領域、更らには国により、あるいはまたその図書館の置かれている事情によって、必ずしも同一の類型を辿って来た訳ではない。しかしそれらが今日までに到達し得た最も新しい段階が、主題別部門制 (subject departmentation)²⁾ であるとする点については、ほとんど現在異論がないといってよからう。この形態は公共図書館において、最もはっきりした姿を執るものとなって来ており、用語自体も実は、「規模の大きい公共図書館において」という但し書さえ付されているほどである³⁾。しかしながらこれを支えているもの、すなわち明確な主題単位による蔵書の分化現象は、決して公共図書館特有のものではなく、その原理的なものの適用は、大学図書館においても、すでに比較的早くから導入されていたものである⁴⁾。ただ大学図書館にあっては、部局図書室との絡み合いが、公共図書館の場合とは異った様相を生み出している点で、その実情には非常に大きな相違が見られる。

このように、歴史的段階の最も新しいところに位置している主題別部門制も、その実態を詳細に分析して行くと、勿論数多くの課題を包含したままである。またその運用を図る効果的方法についてもなお多くの論争が現に行われている。そして、メイゼルもいっているように⁵⁾、この形態が公共図書館のもつべき体制としては、究極のものであるなどとは、到底いい難いことでもあろう。しかしながら、1910年代から考えて見ても、これに代るような、またこれよりもすぐれたものとして特に挙げ得るものは、結局何一つとして現われては来なかったのが事実であり、そこにこの形態の有つ現代的な意味、同時に今日的な重要課題が蔵せられていると見なければならぬ。わが国においては勿論、この形態についての体験は日もおおしく、極く一部の図書館において、部分的によろしく実施を見るようになった程度であり、いわば現在はその試行的段階にあるということができよう。さきに、アメリカの公共図書館におけるこの制度の発展について、概見して来たところを發表して以来、このことについての関心がとみに高まり、多くの質疑に接するようになった。

1) この稿は、次にかかげた論文に対する補足または続篇の形をとっている。しかしながら実際には昨年12月27日、大阪市立中央図書館における第1回専門職員研修会において、「主題別閲覧制の問題点」と題して行った際の講演原稿に筆を加えたものである。

2) 拙稿「アメリカの公共図書館における主題別部門制の発展」 図書館界 第12巻第6号 1961年3月。

3) A. L. A. Glossary of Library Terms, 1948. ここでは Subject departmentalization という用語のもとに解説を加えている。

4) Wilson, Louis Round & Tauber, Maurice F. : The University Library, 2nd ed. N. Y., Columbia Univ. Press, 1956. pp. 146, 592.

拙稿「アメリカの大学図書館について」 大学資料 第13号 文部省大学学術局 昭和34年3月。

5) Maizell, Robert E. : The Subject-Departmentalized Public Library. *College and Research Libraries*, vol. 12, p. 254, (No. 3, July), 1951.

この稿は、従ってそういう質疑に答える意図をも含めて、これを図書館資料の蔵置形態ならびにその分化現象のもとに捉え、その要因をなすもの、また新しい形態を生み出す上に作用して来た機能を考察し、今日的な意義の解明と、将来への展望に役立てようとしたものである。

2

蔵書の分化現象を捉えようとする場合、そのためにはいろいろに異った立場が要請される。従ってまたその原因について人々が解釈しているところも同一ではない。すなわち図書館が次第に大きくなって来ると、図書館の職員やこれを利用する人々の中には、蔵書は一個所に集中されていて、一つの閲覧室の中でそのことごとくが利用される形をとっている方が却って望ましいと考える人がたとえあったとしても、蔵書は結局分割されて行き、閲覧室もまたそれに伴って分化の現象を自然に迎るといっているのは、蔵書の増大がもたらす結果として、自然発生的にこの形態を捉える立場であり、これに対して、人間のもつ心の働き、その方向という観点から、次第次第に特殊専門的な分野に向ってそれは分岐・移行するものであるとし、その傾向を受け止める当然の形として、この現象を理解しようとしているもの、更らにはまたそれを単に自然発生的な発展とは見ないで、図書館人自体が図書館資料の合理的な管理、その効果的な利用を図る確実な手段に到達したことによって、そのような形態は招来されたものだとしているものとがある。以上のように大別して3つの考え方があるということは、現実存在している分化形態のさまざまな類型のもつ違った性格をそのままいい表わしているということもできるであろう。カッターも述べているように、1876年頃までといえ、アメリカの図書館人の中にも、書物を書架上に、そのもつ主題によって、それぞれの群を構成して行く、すなわち書物に対する主題分類ということについて、何んらかのシステムに考え及んでいた人は、ほとんど存在しなかったのが実情であって、このように主題に対する認識が未だ非常に稀薄な段階においては、蔵書の分化もまた、主として書物のもつ物質的な条件によって規制された。すなわちその有つ大きさや製本装釘の色別による図書群の構成、あるいは別置の措置をとる分化がそれであり、これと共に、貴重書・通俗書・特別集書・禁止本など、管理取扱上の条件を異にするもの、新聞・雑誌・短命物のように出版形態の相違するもの、写本・古文書類・絵画のように、作製された事情の相違も、初期における蔵書分化の構成要素として現われている。しかしながらこれらはいずれも書物そのものに本質的に具っている必然的要素によってではなく、むしろ偶有的なものであり、こうしたものによって蔵書が分化し、別の部門を構成して行ったことについて、それを思いつきの古い方式だと、する言葉を見るのは、これ

- 6) Wheeler, Joseph L. & Githens, Alfred Morton : *The American Public Library Building*, 2nd Printing. Chic., ALA., 1950. p. 112.
- 7) Barton, Mary M. : *Administrative Problems in Reference Work* in Pierce Butler ed, the *Reference Function of the Library*. Chic., Univ. of Chicago Press, 1943, p. 227. (*The Univ. of Chicago Studies in Library Science*).
- 8) Cutter, William Parker : Charles Ammi Cutter. Chic., ALA., 1931. p. 40. (*American Library Pioneers* Ⅲ). 著者は、チャールズ・カッター (1837—1903) の甥に当る。
- 9) Wheeler, Joseph L. & Githens, Alfred Morton : *Ibid.*

に対応する新しい方式が、主題を基にして書物に不変に内在している本質的なものを、その構成要素として選ぶようになったためである。このようにして19世紀の後半になると、これら2つの方式が対照的に眺められ、新しいものに対して古いものは、「伝統的部門化制」(traditional departmentalization)とか、あるいは「旧方式」(antiquated system)と呼称されるものとなった。しかしながら、蔵書分化の主導的要素が、偶有的なものから本質的なものに移行して行ったからといって、古い形態が悉くこの新しいものに替えられてしまったことを意味する訳ではない。その中には現在に至るまでそのままに存続し、一層強化されて来ている事例も見られるし、その間には、児童用図書・青少年用図書・婦人用図書などの部門のように、主としてそれを利用する対象の年齢・性別などの相違によって、新しい部門構成さえも行われて来ている。更らにはまた20世紀の曲り角をすぎると、先ず一館的ながら、利用頻度に基づいた図書の分化現象をも伴うようになった。すなわち利用されることの至って少い資料を、頻繁に利用されるものと一体の形で蔵置して来たことに対する反省に始まる両者分離の措置であり、1920年代になると、数個の図書館間を結んだ協同形態によって、各館における利用度の非常に低い資料が1個所に収集され、そのための図書館を別個に新しく建設してゆく現象さえ見られるようになった。¹⁰⁾このような事情によって後程言及するごとく、今日主題別部門制という名称で呼んでいる形態も、その実態としては言葉の厳密な意味における主題によって、截然と割り切られた形を執っているものとして理解しようとするには、なお偶有的な区分要素が余りにも多すぎる。蔵書の分化現象を生み出して行く原因について、上述のような、相異った解釈が現実に見られるのも、こうした事態がもつそれぞれの側面に、その因を発していると解釈することができるであろう。結局主題別部門制図書館という名のもとに呼ばれているものにしても、主題というものを主導的・基調的な要素として、蔵書の部門別分化が企てられている図書館の意味に受けとっておくことによって、現実存在する諸形態は却ってよりよく理解されるということはいよい。

3

インドのランガナータン博士によって、「近代図書館学の父」¹¹⁾(Father of Modern Librarianship)とまで呼ばれているデュイ(Melvil Dewey, 1851—1931)が、館界に打ち立てた功績の偉大であった諸事績についての言及はこの稿の圏外であり、従っていまそれに立入る積りはないが、彼が図書館界に革命的な影響を与えたとされる言葉の内容については、更めてこれを具体的

10) 拙稿「図書館間の協力形態とその一類型」図書館界 第13巻第4号 1961年10月。

11) Ranganathan, S. R. : Colon Classification and its Approach to Documentation in Shera, Jesse H. & Egan, Margaret ed. Bibliographic Organization. Chic., Univ. of Chicago Press, 1950, p. 98. (The University of Chicago Studies in Library Science)

デュイは正しくは、Melville Louis Kossuth Dewey であるが、彼は終生簡易綴字法(simpler spelling)の主張者であったために、自ら Melvil Dewey と書き、終には Dewey を Dui とした時代もあった。従って本稿では「デュイ」と表記することにした。

に考さつしておく必要がある。彼の名声を世界的なものとした一つは、いうまでもなく十進分類法 (Decimal classification) の創案ではあったが、その第11 (1922), 12版 (1927) の改訂業務に際してデュイを助け、従って至って親しい間柄でもあったフェローズ (Dorcas Fellows) は、デュイによる十進記号法が、いろいろな理由で喝采を浴び、一方またその構成が至って簡単であることが、世界中に採用されて行った大きな要因をなしていることは疑を容れないとしても、この分類法には、実はそうしたことは別の、それよりはもっと本質的に重要な意味を有つ他の事柄があることに言及している。¹²⁾そしてそのものこそ図書館の行政に革命的な影響を与えたものであって、それは当時ほとんど普遍に行われていた書架上における図書の固定式配架法 (fixed location on shelves) を、相対的配架法 (relative location) の原則に代えてしまったことであると説明している。そして更らにこの原則は、たとえ記号とか全体的構成がどのようなものであるにせよ、この後に現われて来たあらゆる分類法の本質的要素となつて来ているものだと付け加えている。同じような見解はまたペティの言葉の中にも見出すことが出来る。¹³⁾すなわち彼女は、固定式配架 (fixed shelf location) という方法は、1876年に公にされたデュイの十進分類法が現われ出るまでは一般的に行われていた実際であつて、勿論僅少の進歩的図書館人の間では、書架ではなくて、書物そのものをクラスにまとめて行く (classing) という新しいアイディアを、すでに実地に試みつつあつたことも事実ではあるが、いずれにせよ彼におけるこの「相対的」構想 ('relative' scheme) は、1,000年間の古きに亘つた方法を変改してしまったという点で、革命的なもの (revolutionary) となつたと述べているのである。

いま図書の蔵置分化という問題を考究するに當つて、殊更にデュイを回顧し、彼が館界に革命的なものをもたらしたといわれる言葉の具体的な内容を追求し、それが相対的配架法の原則を確立した点にあつたことを確認しようとしたのは、ただそのことだけに特別の意味があるわけではない。実はこの配架法こそ、図書の蔵置形態を根本的に規制する重要な要素をなすものであり、長い伝統的な方法がデュイによって打破されたとすれば、これを契機として図書館内の書物は、その配置の様相をすっかり変つたものとしてしまうからである。従つて蔵書の分化という現象も、新旧両形態の間では、当然違つた姿を執つて現われることになる。

さてデュイ自身はどうかといへば、実のところ彼における十進分類表の作製は、その当初にあつては、別段旧来の固定式配架法を改変するという明確な意図に発しているものではなかつた。「このシステムは、目録を作製したり索引をつくる目的のため考案されたものであつた。しかし試験的に試みた結果、書架上の書物や小冊子類に数字を与え、それらを整頓して行く上に非常に価値

12) *Library Journal*, Vol. 57, p. 152, (No. 3, Feb. 1), 1932. この号はデュイの追悼号になっていて、その中にフェローズの追憶文が収められている。

Dawe, Grosvenor, ed. : *Melvil Dewey ; Seer : Inspirer : Doer, 1851-1931*. N. Y., Lake Placid Club, 1932. p. 176.

13) Petree, Julia : *Subject Headings ; the History and Theory of the Alphabetical Subject Approach to Books*. N. Y., H. W. Wilson Co., 1946. p. 23, foot note 2.

の高いものであることが判明した」と自ら記しているのは、すなわちこの間の消息をよく物語っているものである。その発端をなしたものは、彼が在学し、同時に傍ら勤務をしていたアーモスト大学図書館 (Amherst College Library) の実情を仔細に観察して、その蔵書の配架形態が非常に不合理であり、不便と非能率・不経済と不合理のもとにあることを身をもって体験したことであって、カスターも、「1872年におけるアーモスト大学図書館の内部が、混乱した実情のもとにおかれていたために、それを組織的に整理し直して行こうとする積極的な意慾に彼を誘って行ったに違いない」と記している。同時にまた、このことに関連して、デュイが5才のとき、母親の食器室を整頓し直した挿話を付け加えると共に、彼が性来、何事でも改革して行くことに烈しい熱意の持主であったこと、それがまた時間の浪費に対して抱いていた憎悪の情によって更らに強められ、この大学図書館の中に見られた混とんを正し、秩序をもたらし行くために努力を払って行くことが当然のことであると思わしめたと言ひ、アーモスト大学の課題に解決を与えることによって、全世界の、莫大な数に達する図書館のために高度の、整然とした体制を結局は成し遂げることにもなったのだと説明している¹⁴⁾。

デュイがアーモスト大学に入学したのは1870年、彼をもって、この大学が創立 (1821年) されて以来、学生の身分のままで、すなわち今日わが国において、学生アルバイト、と呼ばれている形で図書館に勤務することになった最初の人物であったと伝えられているが、それが正確には何時から始ったかということになると、恐らくは1872年の秋頃からではなからうかと推定されている程度である¹⁵⁾。しかしその入学から卒業後の2年目に当る1876年の春、ここを去ってボストンに赴くまでの約7年間は、彼における「アーモスト大学時代」と呼ばれる重要な人生の段階を構成する。そして1873年5月8日という日をもって、彼の分類方法の改革に関する新提案が、覚え書 (memorandum) として「アーモスト図書館委員会」 (Library Committee of Amherst) に提出されたのである。この覚え書は、現にこの大学の資料室 (Amherst Archives) に保存されているものであるが、ライダーはこれをもって、デュイ十進分類法が公表されることになった最初であると記しており、クロームが、「ライブラリー・エコノミーの歴史も、1873年以前は、本当に真暗がりであったに違いない¹⁶⁾」と述べているのも、この年における D. C. の発表が、その暗

14) Dewey, Milvil : Decimal Classification and Subject Index, *Public Libraries in the United States of America : their Condition, History and Management* XXVII Pt. 1, p. 623-644, Special Report, Department of the Interior, Bureau of Education, Wash., Govt. Printing Office, 1876.

15) Custer, Benjamin A. : Dewey Decimal Classification and Relative Index, 16th ed. 1958. *Editor's Introduction*.

16) *Library Journal*, Vol. 57, p. 145-151, (No. 3, Feb. 1), 1932. Melvil Dewey.

17) Dawe, Grosvenor, ed. : *Ibid.* p. 49.

18) Rider, Fremont : Melvil Dewey. Chic., ALA., 1944. p. 29 (*American Library Pioneers* VI).
ライダーの夫人は、デュイの姪に当り、2人は姻戚関係にあった。

19) Dawe, Grosvenor, ed. : *Ibid.* p. 180. この言葉は、1931年12月10日、すなわちデュイ80才の誕生日を祝う手紙の中に記されていたものである。クローム (Mary Elizabeth Krome) は、デュイの教え子の一人であった。

やみを照して出していく光明となって行った経緯を伝えているものである。このことはまた、ドウが、この D. C. が創られ、世界中に広く普及して行ったことをもって、「図書館近代化の第一歩」²⁰⁾であるとしていることと相通ずるものである。しかもこうした大きな意識を世界の図書館界に留めたものも、デュイにとっては、始めて図書館との関係をもつこととなった秋から翌年の春に至る、せいぜい10 個月足らずの研究と思索の所産であり、1873年の5月、いまだ21才の学生にすぎなかった。

4

図書の配架について相対立した関係をとる2つの方法、これに対して、相対的 (relative) 絶対的配架法 (absolute classification) という名称を付すことも恐らくデュイに始まるものと見て差支えないであろう。1876年といえば、アメリカ独立百年祭の年に該当しており、いろいろな行事がこれを記念して行われた中でも、図書館の分野においては、米国政府によって刊行された「アメリカ合衆国の公共図書館」²¹⁾は、その権威と膨大において、それ以前に公にされた世界中の、この面における出版物も、到底比肩し得ないものだといわれているほど貴重な資料となって来ているものである。デュイの D. C. も実はこの中の一部として、対外的に公表され、これによって、以前にあってはただ、「アーモスト分類法」などと呼ばれていたものが、事実上世界の分類法としての脚光をあびることになった。この中でデュイは、絶対的配架法という言葉を用い、他面これに対し、「われわれのシステム」と呼んでいるものを対立させて説明を加え、「図書配架の実際に、大きな相違点をもっているシステムを鮮明にして行くための必要上、われわれは相対的および絶対的という用語を使用する」(p. 635) と特記している程である。また1876年10月の3日間(4~6)、フィラデルフィアにおいて開催された図書館人会議の第7部会においては、「特定書架の特定個所上における絶対配架と区別して、私が相対的配架法と名付けているもの」という表現さえも使用している²²⁾。しかしながら一方ではまた人々の誤解を避けるために、この相対的配架という方法は、彼によって生み出された全く新しいアイディアだと主張する積りはないこと、しかし強く主張しなければならないのは、この方法が非常に大きな利便を保証し、同時にまた、これまでの方法が持っていた大きな諸欠点を除くことができるものであることを発見したことだとも記している。結局彼の使用したこの用語は、絶対的という語の代りに固定的 (fixed)、相対的の代りに可動的 (movable) などの用語が一般には使用され、カッターの如き

20) *Ibid.* p. 49.

21) 14) に記載のもの。ただし、表そのものは、この年アーモスト大学から出版され、大学名を付しているために、「アーモスト分類表」という名称をもって知られている。

22) この会議は普通 Conference of Librarians at Philadelphia と呼ばれる。参加登録者は103名、当時における指導的図書館人のほとんどが出席している。そしてこの会議がアメリカ図書館協会創立の契機をなした。この会議は7つの部会 (Session) に分れて、いろいろな問題を討議し、その議事録は「ライブラリー・ジャーナル」誌第1巻 (1976年9月30日第1号発刊) の90~145ページ (Nos. 2-3, Nov. 30) に収められている。デュイのこの言葉は142ページに見える。

は、固定式に対して相対式というチグハグな組合わせのもとに、この2つの方法を掲げているなど、²³⁾人によりその使用上の実際には、至って任意な態度の見られるものである。

デュイにおいて、彼の十進分類法の理念が展開されて来る前の段階は、当時における図書配架の実情を仔細に凝視・検討して行く態度をもってした時期に該当するが、彼は当時行われていた固定式配架の方法ならびにアルファベット順配架法のいづれについても満足することができず、そのことによって、新しい方法の発明という経緯をたどることになった。そのうちアルファベット順配架法というのは、ただ著者名あるいは書名の音順によって書架上に書物を列べて行くものであり、1873年4月1日訪問したニュー・ヨーク州立図書館の実情について彼は「書物の主題については何らの顧慮を払うことなく、アルファベット順に配列していた」²⁴⁾と述べている。カッターも記しているように、このアルファベット順配架は、²⁵⁾相対的配架法の一形態との解釈もなし得るであろうが、しかしデュイがこの言葉によって理解しているのは、主題グループをもとにした立場であって、自然それはある限定のもとに使用されていると考えねばならない。

これに対して固定式配架は、書物が置かれたり蔵まわれている部屋・書架・書棚・本箱などとその書物との関係が固定的となるものであり、自然如何に書物が新しく殖え、蔵書が増大して行ったとしても、すでに与えられてしまったその絶対的位置には何んらの変動も行われぬ。ブレイクが、古い時代の図書館において、目録係たちが共通に使っていたのは、書物の位置を割当てる (locating) という表現であって、彼らは決して書物を類属させて行く (classing) という言葉は用いなかった、²⁶⁾といっているのも、この事情を説明したものである。この固定式配架法はよくデュイ以前の方法という表現をとって説明される。従ってデュイという人物、直接には彼の十進分類法が世に現われ出たときを契機として、相対的配架法の時代に移行するのが図書館界の大勢であり、ライダーもこの相対的方法が余りにも当り前のものとなってしまっているために、いまの図書館人のうちその多くは、この語が何を意味しているかさえないほどだ、と述べた後、固定式配架法は、ただヨーロッパだけに残存しているものだとも付け加えている。²⁷⁾しかしながら固定式配架法が何も現在アメリカの図書館界から消滅してしまっている訳ではない。古い図書館であるとか、²⁸⁾あるいはまた蔵書の増大によって、スペースの狭あいを来し、この面で深刻な課題に直面している特に大きな都市の中心部に位置している図書館とか、²⁹⁾利用度の非常に低い資料のみをもって、いわゆる保存図書館の形態を執っているところなどにおいては、この古い方法

23) Cutter, Charles Ammi : Rules for Dictionary Catalog, 4th ed., Rewritten, 1904. *Definition*. カッターは1903年9月6日に死去したために、この版には、甥である William Parker Cutter が、あとがきを誌している。

24) Dawe, Grosvenor : *Ibid.* p. 158. ; Rider, Fremont : *Ibid.* p. 27.

25) Cutter, Charles Ammi : Rules for Dictionary Catalog, 4th ed., Rewritten, 1904. p. 20.

26) Pettee, Julia : *Ibid.*

27) Rider, Fremont : *Ibid.* p. 39.

28) 拙稿「B. フランクリンとフィラデルフィア図書館会社」『図書館界』第11巻第3号 1959年9月。

29) 拙稿「アメリカ図書館の悩み——スペースの問題とその対策」『書架のしおり』第3集 日本ファイリング株式会社 1961年12月。

がそのまま存続していたり、新しく採用されたりしているのが現情である。

勿論一律に固定（絶対）式配架法とはいっても、内容的に見た場合、その性格の上にはいろいろな相違点がある。その中最も単純なものとしては、書物蔵置の空間やその位置が、製本・装釘などから来る色彩上の相違によって、別々の部屋や書架が割り当てられたものであり、最も一般的に見られたのは、書物の大きさによってこれを行う方法であった。これは色彩の統一が外観の美を構成すること以上に、スペースの節約を図ることができるという現実的な効用を備えていることにもよっているが、1731年ベンジャミン・フランクリンらによって創設され、今日ではすでに230年以上の歴史をもつフィラデルフィア図書館会社（Library Company of Philadelphia）が、終始維持しているのも、この大きさによる固定式配架の原則である。創立後10年目の1741年、フランクリンが自ら印刷したこの解題蔵書目録は、この配架の実際に則して、2つ折、4つ折、8つ折、12折の4つに大別されている。このことに関して、1876年この館長であったスミス（Lloyd P. Smith）は、その事情を説明して、この図書館会社は創立以来、その年に至る145年間、書物蔵置の方法を変更したことは全くなく、ただ書物の大きさによって4つの系列（series）をつくり、書物はそのいずれかの書架上に順次架蔵されながら一連的に番号が与えられる仕組であること、各系列は、No. 1をもって始まり、書物に与えられたその番号が「永遠に」書架記号（shelf-mark）になると記している。³⁰⁾

以上2つの種類と共に、部屋とか書架がそれぞれある主題に指定されている形をとっているものがある。この最も理解し易い實際をわれわれに示してくれる好例は、1610年に描かれたオランダにおける最古の大学、すなわちライデン（Leiden）大学図書館の図であるが、ここでは合計22列の書架が、神学に対しては6、文学に4、哲学に2、数学に1、法律に5、医学に2、歴史に4という比率で割当てられ、1,000冊ほどの書物は、全部書架の前面に取りつけられた鉄の横棒に鎖でつながれている。この実情はペティが、「図書蔵置の實際が、最初の主題分類の基ばんを提供した」といい、従って「主題による或る種の分類は、その当初から存在していた」と述べているところをそのまま裏書きするものである。³¹⁾しかしながらこの形態が、デュイのいう相対的配架法と異なる点は、各図書が鎖につながれて、移動することを許さない形をとっていることにあるのではなく、書架が神学・文学・哲学・数学・法律・医学・歴史に割りあて（allocate）ら

30) A Catalogue of Books belonging to the Library Company of Philadelphia, 1741. この目録は、1956年1月17日のフランクリン生誕250周年記念日を祝して影印に付された。（A Catalogue of Books Belonging to the Library Company of Philadelphia; a Facsimile of the Edition of 1741 Printed by Benjamin Franklin, with an Introduction by Edwin Wolf 2nd. Philadelphia, the Library Company of Philadelphia, 1956. この目録の内容は、Books in Folio, Books in Quarto, Books in Octavo, Book in Duodecimo の4つに大別され、一番最後に Folio's added. として、2部の図書が書き加えられている。

31) *Library Journal*, Vol. 1. 1876. p. 71. これはすでに記したフィラデルフィア市において開催された図書館人会議の部会席上、主としてデュイとの間に取り交わされたディスカッション中の言葉である。

32) 拙稿「記録の文化史」図説世界文化史大系（別巻）角川書店刊 昭和36年7月 第218図。

33) Pettee, Julia : *Ibid.*

れているために、その書架上において占める場所が固定し、書架と図書、図書相互間の関係が絶対的不動・不変の立場をもっているためである。しかも書架上における書物の位置を決定する番号は、デュイもいっているように、たまたま書物がその日そこにならべられることになった偶然によって与えられるもので、すなわち偶有的条件によってである。従って書物がそこで一杯になり、更らにそこから食み出る事態になって来ると、書棚やアルコーブのあるほかの部屋に追いやられるとか、その書架の書物全体を他の余裕をもつたところに移し変えろとか、その度毎に記号の変更、目録の訂正など、この方法が引き起す煩雑な現象と混乱とが現われて来る。デュイが直接訪問して実地を調査した50以上の図書館は、その殆んどが固定式配架の方法に拠っていたために、如上の実情によってもたらされる能率の欠如、時間と金銭の浪費をそこに発見して驚倒したとまで記し、³⁴⁾更らに1931年第80回目の誕生日を迎えることになった際、友人たちに書き送った手紙³⁵⁾の中でも D. C. のことに思いを馳せ、それが、1873年から76年に至るアーモスト大学における一番重要な仕事であったこと、そして結局はそれ以前に確立されていた方法との根本的訣別にもたらし、特に宣伝をした訳でも、注文をとった訳でもないのに、その偉大な力は、20個国の14,000館にまで及び、アメリカ国内でいえば(1926年)、公共図書館中の96%、大学図書館の89%、イギリスでは公共図書館の56%がこれを用いるようになった喜びを語ると共に、その中で D. C. に対し、「偉大なる労力節約者」(great laborsaver)という表現を充当している。固定式配架法によって、それ以前の図書館が蒙っていた莫大な浪費を救済することになった事情を語っているのである。

すでにのべて来たように、相対的配架法というものは、アイディアとしては決してデュイに始まるものではない。少数ではあったにせよ、進歩的な図書館人の間ではすでに試みられつつあった。プール(William Frederick Poole, 1821-1894)もまたその一人であり、1851年頃に、彼のいう可動式配架法を実施したことを記録している。³⁶⁾そして1856年に至って、ボストン神殿図書館(Boston Athenaeum)では逆に固定式配架法を採用することになったいきさつをも伝えている。勿論特に彼がそれを好んだからというよりは、これには別の理由があったと付言してはいるが、とに角彼としても、各書架に相当の余裕を残しておきさえすれば、新しく図書を受入れて行くには差支えないとの考えを始めはいただいていたというのである。しかしそれは結局失敗で、あるアルコーブなどはすぐ書物が一杯になって溢れ、ために始めからのやり直しを迫られ、この図書館に在職していた13年間に、増加率のはげしいアメリカ史の部などは、3回も整理をし直し、その度毎に書架目録を新しく作りかえねばならなくなって、終にその煩雑に堪えず、その時以来、固定式配架法を廃止して可動式に復帰することを決意したと述べている。従ってその後彼が館長と

34) Rider, Fremont : *Ibid.* p. 28.

35) *Ibid.* p. 27.

36) Dawe, Grosvenor : *Ibid.* p. 169. これが事実上デュイの farewell communicationとなった。なおD. C. が採用されている実情については、1958年において(アメリカ)、公共96、大学89、専門64%と報ぜられている(Dewey Decimal Classification and Relative Index, 16th ed. *Editor's Introduction*)。

37) *Library Journal*, Vol. 6, p. 121, (No. 4, Feb.), 1881. 始めは、Society of Brothers Unityの図書館、後にはボストンのMercantile Libraryにおいて。

なったシンシナーティ (Cincinnati) およびシカゴの公共図書館は可動式を採った少数の先達の意義を担うものとなった訳であるが、デュイの方法については、「その詳細を知悉する迄に至っていないことを告白せざるを得ないが、いずれにせよそれは、書物に固定的な場所を与えることによって生ずる避け難い混乱を³⁸⁾排除くものである」と語っている。19世紀の後半、館界実力者中の第一人者でもあったブルにおいて、この言葉を聞くことは、固定式から相対式への過渡期における館界一般の様相を推察せしめるに充分なものがある。

5

デュイに先立つ以前における図書蔵置の一般的形態を、以上敘述して来たところによって要約すると、ある図書館は書物の大きさに基づいて配架し、ある図書館では著者名又は書名のアルファベット順に、中には装釘の色別に、極く少数のものだけが、その館だけでなく、他でも使われてよさそうな、多少科学的な基礎の下に配架されていたということができよう。³⁹⁾ この中書物の大きさ、著者名、書名、色の4つを配架の基本的要素におくのは、その書物のもつ主題が全く考慮に上っていない方法である。この主題については、ごく簡単に「書名中に述べられていると否とにかかわりなく、その書物の論題となっているもの」³⁹⁾とも説明されているが、デュイは、「書物にとっては、それがもつ知的なものの相違によって、それぞれ異った図書群に構成されて行くことの方が、⁴⁰⁾はるかに重要なことに思われる」といっているように、これを知的なものという概念のもとで捉え、その書物にとってそれは本質的で不変なものとしている。またカスターが、書物に対する分類番号は、書物の形式とか、書名に使われている用語 (wording) ではなく、その内容 (contents) が普通これを決定すべきものである、⁴¹⁾といっているその内容も、結局は主題を指しているものと見て差支えない。

デュイに先立つ以前の時代において多少科学的な基礎をもつ方法といわれているのは、この主題に関連した蔵置形態を意味するものである。たしかにそれぞれの部屋、アルコーブ、書架などに対してある主題が割当てられ、そのためには、たとえその多くが、各館において作製された分類表⁴²⁾によるものであったとしても、何らかの拠りどころとなるものが存在していた訳である。デュイの分類表が、ハリス (William T. Harris) の逆ベーコン式を基礎に、主題による図書配列の表を使用する決意をしたことは、すでに著名な事実であるが、デュイより以前にどのようなものがそのために用いられていたにせよ、分類されたのは書棚とか書架であって、書物そのものではなかったという点で、デュイのそれとの間に、根本的に重要な一線が画される。すなわちデュイは自己の分類表を作製するに当って、アリストテレス、ベーコン、ロックその他の哲学者

38) Dawe, Grosvenor : *Ibid.* p. 157.

39) Cutter, Charles Ammi : *Rules for a Dictionary Catalog*, 4th ed. 1904. p. 23.

40) Dewey, Melvil : *Decimal Classification and Subject Index in Public Libraries in the United States of America*, 1876, p. 633.

41) Custer, Benjamin : *Ibid.*

42) ライダーはこれを home-made classification と呼んでいる (Rider, Fremont : *Ibid.* p. 31)

によって思索されて来た知識の分類について先ず研究し、次いで1871年ニューヨーク徒弟図書館 (Apprentices Library, N. Y.) のシュワルツ (Jacob Schwartz) が発表したもの、およびその前年ハリス (W. T. Harris) が自分の属していたセント・ルイス公学校 (St. Louis Public School, Missouri) の図書館■録を作製して行くための必要上、ベーコンの知識表の順序を転倒・拡大して作り上げた、図書館のための分類表を詳細に検討し、結局ハリスのものに基づいて、主題によって書物を配架するためのものとして、それを構成して行く方針を打ち樹てた訳であったが、その点同じ十進法に原理を置く分類表、すなわち1856年にシャートルフ (Nathaniel Shurtleff) によってつくられたものや、⁴³⁾ ヨーロッパの方でいえば、1583年という早い時代に、デュ・メーン (Lacroix du Maine) が、フランス王アンリー2世 (Henry II, 1519-59) のため、おのおの100冊を収容する100個の本箱に図書館をすっかり整備するように考案したもの、また1790年頃グラスゴウ (イギリス) のミッチェル図書館 (Mitchell) において使われていたように、書架を10個の棚段に区切り、その中の数個に書物の各クラスを割当てて行くものなどにしても、⁴⁴⁾ すべてこれらは、部屋・書架・書棚・本箱そのものが十進的形態のもとにおかれていたのであって、書物にそれを適用して行ったものではなかった。従ってデュイはこれらのものからは、何らの感動をも受けるどころがなかったのである。⁴⁵⁾

一方においてはまた、このようにデュイによる新しい分類原理が確立されることによって、図書の蔵置形態は、その長い歴史的な殻を打ち破り、図書そのものに本質的に内在している主題を中心に、大小さまざまな群を構成するものに移行することになり、その同じ19世紀の後半にはまた図書運用上の新しい形態として、開架制の問題が登場して来る。そして蔵書分化という課題もまたこれによって別の性格を加えるものとなった。開架制はいうまでもなく、閲覧者が直接蔵書に触れる体制をもつことによって、図書の効果的利用と閲覧者の便宜を考慮する立場に基づくものであるが、1876年アメリカ図書館協会が創立されてから、その後の10年間以上は、この協会の総会が開催されるたびごと、烈しい討論の対象となったものといえ、この開架集書と、児童の図書館利用の問題であり、これに対する賛否両論が⁴⁶⁾ 活発にたたかわされたのである。そして英米両国の図書館界において、共通に開架制の問題が重要な課題として採り上げられる契機をつくったのは、1877年10月の2～5日、ロンドンにおいて開催された図書館人会議であった。これにはアメリカの図書館関係者も多数参加したが、デュイもその一人であった。しかも彼は小規模の通俗図書館のような場合は別としても、比較的大きい図書館において、閲覧者が自由に直接書架上の書物に触れる

43) Shurtleff, Nathaniel : A Decimal System for the Arrangement and Administration of Libraries, privately printed. Boston, 1856. (Sayers, W. C. Berwick : An Introduction to Library Classification, 9th ed. Lond., Grafton, 1955. p. 115)

44) Sayers, W. C. Berwick : *Ibid.* p. 114-116.

45) Custer, Benjamin A. : *Ibid.*

46) Rose, Earnestin : The Public Library in American Life. N. Y., Columbia Univ. Press, 1954. p. 22.

ような方式は、実行不可能なことであると主張し、開架制を非難する立場をとったことが記録されている。⁴⁷⁾ このことはカッターが、同じくこのロンドンにおける会議で、当時ウースター (Worcester, Mass.) の図書館長であったグリーン (Samuel Swett Green, 1837-1918) の提案した「図書館員への接近」(access to librarians), すなわち後にレファレンス・ワークとして発展して来たものの重要性についても、至ってえん曲な形ではあったが、矢張りそれに反対するものとしての立場を表明したことが伝えられていることと共に、われわれには非常に興味を表した人とするものである。すなわちカッターの場合は、この前年「辞書体目録編成規則」を発する課題を提供して、彼には目録類に対する強い信頼心があり、これを上手に使用して行きさえすれば、閲覧者は別に図書館員を直接煩わすことを要しないで、自分の知りたいと思っている事柄を見付け出すことができるとの見解を執っていたのである。デュイも同じく、同年十進分類法を一般に発表した人として、彼の分類体系に準拠した目録は、書庫内における■書の蔵置形態を更に詳しく展開したものとなり、従って分類法の正しい理解と、目録の検索とによって、書物そのものに直接閲覧者を接触させる考慮はこれを必要としないと考えたのである。ここにデュイの一つの限界がうかがわれる。すなわち彼は伝統的な圖書の蔵置形態に対しては、強い反発を意識したけれども、しかしそこで主要な動機となっていたのは、不合理・非効率・不経済・浪費などの概念であって、これを利用する閲覧者の立場との結びつきについての考慮が、ほとんど彼の言葉の中からは聞きとれないことである。このことは、蔵書分化の歴史的段階から眺めると、主題別部門制が、むしろ閲覧者の主要な関心を捉え、これを重視・強調し、図書分類法の立場をも越えて、それにも拘らない新しい関心部門 (interest departments) の構成にまで到達して来た現段階と直接の連がりをもっている開架制によって引き起こされた蔵書分化の系譜とは、性格的にも異ったその前の段階としてこれをながめるべきであろう。

6

主題別部門制は、図書運用上の課題としては、開架制に引き続いて現われたものであることはいうまでもない。また蔵書分化の形態としては、閲覧者の関心に直接連る同一類型に所属するものとして、両者の関係は非常に密接である。しかしながら本稿においてはむしろその焦点を類型を異にする2つのものに向け、それらを対照的に取扱うことを企図しているために、開架制の問題を独自に取扱うことはこれを避け、主題別部門制の発展を中心課題としながら、それに関連する限りにおいて言及して行くことにしたい。

主題別部門制という概念を展開した最初の人として歴史的に記録されるのは、1851年頃に、す

47) Bostwick, Arthur E. : The American Public Library. N. Y. & Lond., D. Appleton, 1917. p. 9. この会議はさらには International Library Conference, London Conference of English and American Librarians, London International Library Conference, London Conference of Librarians などとも呼ばれている。

48) Rothstein, Samuel : Concept of Reference Service in American Libraries. *The Library Quarterly*, Vol. 23, p. 6, (No. 1, Jan.), 1953.

でに可動式配架法を試みたこの面においても先駆的人物のウィリアム・プールである。そしてこの制度を、1887年彼が館長として晩年をすごしたシカゴのニューベリー図書館 (Newberry Library) に実施したものをもち、その原型的なものと見做すことについては、学界の一致するところと見て差支えない。しかしこのアイディアそのものは、これより10年以上も前にすでに公表され、それも1876年10月、フィラデルフィア市で開催された図書館人の会議における部会 (第5部会) の席上においてであった。⁵⁰⁾ この部会においては、7つの課題についての討論が展開されているが、その中の一つに図書の損傷 (ガスと熱とによる) が採り上げられており、これが図書館建築の問題にまで発展し、ここでプールは将来におけるその在り方として、中央に事務室を置き、これを取り囲んだ形で、一つあるいはそれ以上の主題部門に属する図書をおのおの収蔵した一連の部屋 (a series of rooms) を設ける彼の構想を開陳している。すなわちこの最初の公表はいわば偶然の機会と偶然の話題によって引き出されて来たといつてよい。しかしこのアイディアは、それより5年後の1881年になると、⁵¹⁾ 更に具体的な形として展開され、延いてはそれが、ボストン公共図書館、ボストン神殿図書館、アスター (Astor) 図書館 (ニュー・ヨーク)、シンシナーティ公共図書館、ピーボティー図書館 (ボールドティモア)、議院図書館などに代表される因習的図書館建築へのはげしい批判となった。彼のプランそのものは、仮りに10個の主題部門に分割された一連の部屋をサンプルとしたものであるが、その蔵書数、それぞれの部屋の大きさ (面積と高さ)、しかもさらに4階建として、40個の部屋を準備し得る建築の下で提示されている。細部の点に及んでいえば、初期の段階においては、数個の関連部門を併合して一部門を構成する方法、各室の備品類、書架の形態、採光、各室の連絡、事典・辞書 (一般) 室などに言及したものである。ここで一つの事例として彼が掲げている主題部門は、美術・手工芸・歴史・アメリカ史・政経学・社会科学などであった。そして特に注目されるのは、彼がこのような部門は知識の分類とは別個のものをもって、相当の数にまで拡大して行くべきものだという短い一言を付け加えていることである。主題別部門制が、知識の分類・図書分類の実際を離れて、閲覧者が抱く主題部門の方向をたどって発展して行くその原型的なものが、この言葉の中に看取できるといっても、決して過言ではないであろう。このように19世紀の終り、アメリカの図書館界に主題別部門制がその思想的根幹をおろして来た理由については、勿論いろいろな解釈もなされている。大体時期を同じくしての大学図書館蔵書の異状な発展から来る分化の現象、公共図書館に見られた参考・貸出両部門の確立、児童室の独立などの諸現象は、結局図書館が大きくなって来たために、労力を分担し、次第に専門化したものに区切って行くことを不可避としたことを意味している。主題別部門制もこのような一般的情勢が背景となり、これに特別なサービスを必要とするもの、すなわち地

49) McDiarmid, E. W. & McDiarmid, John : The Administration of the American Public Library. Chic., ALA., 1943. p. 82, 119. (Illinois Contribution to Librarianship, No. 3)

50) Library Journal, Vol. 1, Nos. 2-3, Nov. 30, 1876. Proceedings.

51) Conference of Librarians, held at Washington and Baltimore, Feb. 1881. Library Journal, Vol. 6, No. 4, April 1881.

域社会の、しかもはっきりとした関心が表面に現われ出るようになったことが絡み合って、次第に確立されるようになったものだと説明しているが如きは、その代表的な一つの見解である。⁵²⁾そしてこの制度を採用して行くようになったものの多くが、その始めにおいては、おおむね共通に、音楽と芸術、実業と工芸の4部門、すなわち趣味と娯楽、職業と実生活という2つの範疇にはっきりと区分することのできるものを選んでいることも、この制度の初期形態としては、むしろ当然であるということができよう。

ウィリアム・プールによって描かれた構想は、すでに述べた如く、ニューベリー図書館において、とくに角具体的⁵³⁾にその実を結ぶことになった訳であるが、この図書館は現在人文科学系の、しかも稀こうに属する文献の収蔵(約72万冊)においては世界屈指のものである。従ってこれはむしろ学術図書館の部に所属している。公共図書館、しかもその規模の大きなもので、この制度を採用した最初⁵⁴⁾のものは、ボストン市の公共図書館であると一般に見做されているが、それは1884年に現在の建物が完成し、翌年からこれを使用することになった際、美術(fine arts)工芸(industrial arts)という2つの部門を設け、これに対して特別の階床を提供したことを指しているのである。後に議院図書館長の職に40年間(1899-1939)もいたバトナム(Herbert Putnam 1861-1955)が、1895年の2月、ここの館長に就任してから、議院図書館長に転ずるまでの5年間の事績を、これに先立つ初代ミネアポリス(Minneapolis, Minnesota)公共図書館長として在勤していたときのそれと関連して考察すると、彼一個人の中に、この時代における蔵書分化の推移とその大勢とがよく理解される。すなわちボストン公共図書館長として彼が行った主な業績として挙げられているものには、児童室の整備、特殊主題部門の創設、独立した新聞室の新設などに続いて、1898年には当時財務省統計局長であったフォード(Worchington C. Ford)を迎え入れ、新設の「記録・統計部門」の主任にしたことなどがあり、その中児童室は、比較的規模の大きいこの■の公共図書館の中では、全面的サービスを子供に向ける形をとったという点では、その最初のものであった。すなわちここには子供に適した特別な机・椅子などが備付けられ、児童用図書が選択されて列べられ、これによって、児童というものが果して公共図書にとっては正常な顧客であるか否かを中心とする館界の論議に一応の終止符が打たれることになったのである。そしてこれを契機として、「犬と児童とは入館おことわり⁵⁵⁾」という札を、多くの図書館

52) Maizell, Robert E. : *Ibid.* p. 256.

53) バトナムは、1884年ミネアポリス・アセニウムの館長となったが、このアセニウムが1887年に、新しく出来た公共図書館と一所にされたために、その初代公共図書館長となった。この新図書館は1889年12月16日をもって開館した。しかし1891年12月31日付をもって、バトナムは夫人の母親が病氣のため、その近くに住む目的で、この職を辞し、ケンブリッジ(マサチューセッツ州)に移住した。

54) Belden, Charles F. D. : *The Library Service of Herbert Putnam in Boston in William Warner Bishop and Andrew Keogh ed. Essays offered to Herbert Putnam by his Colleagues and Friends on his Thirtieth Anniversary as Librarian of Congress, 5 April 1929. New Haven, Yale Univ. Press, 1929. p. 11.* 当時児童室は The Juvenile Room と呼ばれていた。

55) Munthe, Wilhelm : *American Librarianship from a European Angle. Chic., ALA., 1939. p. 40.*

がその玄関口に吊して来たような姿は、いよいよこの国から一掃されて行くことになった。またこの時新設された記録と統計に関する部門は、1919年になって、連邦政府刊行物についての情報センターの役割を果たす独立部門の設置を促す結果にもなり、これによって公共図書館が公私双方の産業に極めて重要な任務を果たすものとなる新しい第一歩を踏み出すことになったといわれている⁵⁶⁾。そしてさらに1927年に至り、この図書館がもつ産業関係資料と、ハーバード大学経営学部の図書館、すなわちベーカー図書館 (George F. Baker Library) のものとが一体の関係を保って相互に円滑な利用を図り合うという協定が結ばれたことによって、この部門は、ボストン市の経済生活に非常に大きな貢献を果たすものに強化されるようになった。

以上のようにわずか5個年間におけるパトナム館長在任中の出来事のみを採り上げて見ても、蔵書分化の形態の上に見逃すことの出来ない問題がひそんでいる。すなわち、その最初に現われて来た美術と工芸という部門の創設、これに関係する書物・資料の一般図書からの分離は、この都市の特徴的な性格が要求した主題部門であり、新聞室の分離は、資料形態の相違により、また児童室は子供という利用対象の相違がいずれも生み出して来たものである。同時にまたパトナムが、ミネアポリス公共図書館長当時、開架制の問題について非常に強い関心を示していたことは、1890年にこれについての討論会を早くも自館で開催していることによっても想察されるが、この制度について彼が決定的な態度を表明したのは、翌1891年サン・フランシスコにおいて開催されたアメリカ図書館協会の会議においてであった⁵⁷⁾ (10月15日)。実際にはゼンクス (H. F. Jenks) によって朗読された訳であったが⁵⁸⁾、結論として彼が述べているところは、「細かい点に及んでは、どのような困難性が開架制にはつきまとして来るにせよ、接架の自由は、今後長くこれを拒んだままでおくことはできない」ということであった。こうした彼の信念への到達は、ただ理論としてではなくて、これを実際に試みた結果導き出されたものでもあった。すなわち彼は1884年ミネアポリス・アセニウムの館長に就任して間もなく、ここのアルコーブを、すっかり開放してしまって、閲覧者が直接書物を見付け出せるように改め、古風なこの図書館に新しい雰囲気を作り上げるのに成功したといわれており⁵⁹⁾、彼にとって開架制は、いわば、最初からの理想として描かれていたものと想像されるほどである。当時開架制の強烈な主唱者として著名であったのは、クリーブラ

56) Whitehill, Walter Muir : *Boston Public Library ; a Centennial History*. Cambridge, Harvard Univ. Press, 1916. p. 213. 現在の経営学部はブライトン (Brighton) というところに移っており、チャールズ河を距てて、ハーバード大学のメイン・キャンパスと相對しているが、この当時はまだボストンの市域内に在った。従ってこの協定というのは、ベーカー図書館をボストン公共図書館の分館に指定して、産業に関する過去の歴史資料をここに移してしまい、コプリー広場 (Copley Square) の中央館には live books のみを置くことに関するものであった。

57) Access to Shelves [Symposium] : Minneapolis (Minn.) Public Library. *Library Journal*, Vol. 15, Aug. 1890, p. 230.

58) Access to the Shelves, a Possible Function of Branch Libraries. *Library Journal*, Vol. 16, Dec. 1891. p. 62-67. Bostwick, Arthur E. : *Ibid.*

59) Countryman, Gratia A. : Mr. Putnam and the Minneapolis Public Library in William Warner Bishop & Andrew Keogh ed. *Ibid.*, pp. 5-9.

ンド (Cleveland, Ohio) 公共図書館長のブレット (William Howard Brett) であったが、彼が「書物は市民のもの」、従って「その市民が書物を最大限に利用しようとするに当って、一体どんな制限が必要だというのであろうか、制限といった場合それは書物を損傷から守り、一人のものが、他の人の権利を侵す（読書に支障を与える）ことのないようにし、すべての人に、図書館利用に対する平等の権利を与えるために必要なものだけで十分である⁶⁰⁾」と述べている言葉は、パトナムと共に、ひとしく市民の図書館利用の権利を基盤とした開架制支持の立場であって、結局その後における図書館の発達には、こうした人々によって指向された方向を急激にたどって行くことになった。謂わばパトナムの見解は、開架制の問題をめぐる賛否両論に、一つの思想的終止符を打ったものとして特記され、また彼自身にとっては、蔵書に対する次の部門分化を達成して行くに必要な前段階が完了したことを意味するものである。

7

19世紀最後の25年間にごく限られた図書館において見られた開架制の実施に続く、主題別・資料別・対象別による蔵書の分化は、1900年にプロビデンス (Providence, R. 1.) 公共図書館が、フオスター館長 (William E. Foster) の主導によって、産業・芸術・音楽という3つの主題部門に対し特別の階床を充当することに踏み切った事績⁶¹⁾をもって、20世紀の次の新しい段階を迎えることになった。この19世紀中に現われた分化の現象を総括してメイゼルは、主題別部門化という観点からこれを見ると、相対的にいってまだその未熟形態 (immature form) にあったと述べている⁶²⁾。その理由として彼は、先ず初期のこうした制度を始めて実施した創始者達の中には、主題別部門制が本当に活発な活動を展開して行くかどうかについてまだはっきりした見透しをつけるまでには至らないものもあったこと、この制度がすぐれた効果を発揮するには、これを担当する図書館の職員が、それぞれの限られた主題部門において、熟達者とならなければならないし、同時にまたすぐれた図書選択、逆にまた既往蔵書中に欠けているものを見出してこれを補い、専門的な奉仕が容易になる体制を整えなければならないにもかかわらず、そのような段階にはまだ程遠い実情にあったことの2つを挙げている。もっと具体的には、その初期に主題別部門制というものに想到した人々も、物質的な諸条件を整えることに専ら心を奪われていたり、参考用・貸出用双方の図書を、同一主題のもとにただ集めて来て一所におきさえすれば、この制度は出来るものだという程度に考えていた人も決して無かったとはいえないからだとしている。

20世紀に入ってから、主題別部門制の発展に決定的な役割を果たすことになったのは、「完全部門制図書館」 (complete departmentalized library) と呼ばれているものが出現したことで

60) Eastman, Linda A. : Portrait of a Librarian William Howard Brett. Chic., ALA., 1940. p. 21. (*American Library Pioneers* IV)

61) Foster, W. E. : The Providence Public Library. *Library Journal*, Vol. 25, p. 228-32, May 1900.

62) Maizell, Robert E. : *Ibid.*

あるが、その最初のものとして特筆されるのは、クリーブランド公共図書館であった。この図書館が館長ブレットの抱く開架制に対するはげしい熱意に支えられていたことについてはすでに言及したところであるが、1925年に現在の新館が完成するまでの13年間（1913-25）は、ある大きな商業ビルの上部階床を借りて仮住いの形であった。⁶³⁾ブレットは以前の、ガラス扉で主題別のアルコーブを仕切った、いわゆる安全開架制の、その扉を次第に取り除けて行くことによって、旧館時代からすでに主題別開架制実施の構想を徐々に実施に移しつつあった人であるが、1913年における仮舎屋への移転に際して、図書館全体をそれぞれの部門に分割してしまう、いわゆる「ディビジョナル・アレンジメント」をここで徹底的に実験して行く決意を固めるに至った。そのアレンジメントというのは、主題区分によって行うものであって、彼は先ず書物を、レファレンス用と貸出用とに区別すること自体も全く思い付き的なものにすぎないと考え、主題別制においては、この2つをもっと緊密な関係において、双方を一所に利用することができるようにすることが、図書館の職員にとっても、また閲覧者の側からいっても、共にはるかに便利であるという考え方に到達している。またこのプランにおいては、一般的な、また即刻役に立つような基本的参考書類からなる一部門も勿論必要であるとし、その外に16の主要主題をもってする部門化がここで実施され、しかもそれが非常に成功を取めたのである。勿論ブレット自身は不幸にも、1918年の8月、図書館前の停留所で、安全地帯に乗り上げた酔っ払い運転の自動車によって不慮の死を遂げ、ために新建築の完成を見ることなくその生涯を終った訳であったが、⁶⁴⁾新館の主題別制は、彼によって実験されて来たものと同数の部門によって構成されることになった。

クリーブランド公共図書館によって、試験的ながら1910年代に、とに角完全な形態、すなわち図書館全体を各部門別に割り切ってしまう、蔵書もそれに則して分化してしまう措置が採られるに至ったことは、蔵書の分化形態からいえば、全く新しい時代の到来であった。しかもこれに倣って、勿論その形態そのままではなく、それぞれに修正を加えた形で、ロス・アンゼルス（カリフォルニア）、ボールドティモア（メリーランド）、ロチェスター（ニュー・ヨーク）、ブルックリン（ニュー・ヨーク）、トリード（オハイオ）、ウースター（マサチューセッツ）などの諸都市が、さらにはまたカナダのロンドン（オンタリオ州）などの公共図書館にこの完全部門制が採用されて行くことによって、1920年代におけるアメリカの公共図書館は、この制度実施の方向に大きく傾斜し、1940年代は正にこの制度が日の出の隆昌を見る時期に該当しており、現在においても、機会を捉えては、これをより効果的な体制にさらに展開させて行くことに、重大な関心が払われている実情である。特に1925年におけるクリーブランドの新館完成がヨーロッパの館界に与えた影響は大きく、かれらに対して、アメリカの公共図書館の性格と、自らのそれとを、はっきりと対照させて考える機会を更めて与えることにもなった。当時オスロ大学（ノルウェー）の図書館長で

63) この図書館は、1913年までは、教育委員会の建物の中に置かれていた。そして1913年に移った仮館舎は、取敢えず5年契約で借りたビルの一部である（東14番街道のユークリッド・アベニュー Euclid Av. にあった Kinney and Levan Building）。移転した時の書物は20万冊程。

64) Eastman, Linda A. : *Ibid.* p. 92.

あったムンテは、1936年の9月から11月に亘って、カーネギー財団の援助のもとに、アメリカの36州、カナダの4州に及ぶ広範囲に亘って図書館事情を視察したが、アメリカのこうした実情について、「大きな市立図書館に見られる数多い特殊主題別閲覧室が、長い続きをなしている姿について細かく論じて行こうとすれば、われわれヨーロッパ人を、遠く離れたところに連れ去って行く⁶⁵⁾」と書いている。この1936年という年は、主題別部門制図書館の権化であるとまでいわれているポールティモアの公共図書館、すなわちエノック・プラット・フリー・ライブラリーの新館が完成(1932)してから7年目、同じくこの制度を完全な形で採用したロチェスター公共図書館の竣工(1936)後3年目に該当しており、アメリカの公共図書館にこの制度が日の出の隆昌をもって普及して行く寸前の時期である。一方フィラデルフィア市において、アメリカ図書館協会50周年の記念式典が挙行された1926年は、クリーブランド、ロス・アンゼルス⁶⁶⁾の2つの大きな完全主題別制図書館が新建築をもって発足した直後のことであって、これが参列のヨーロッパ図書館人に与えた影響は少ない。マンチェスター公共図書館長のジャスト(L. Stanley Jast)が、クリーブランドのそれを最も新しい型の図書館建築として紹介すると共に、イギリスのそれについて反省を加え、その将来について言及しているのもその一つの現われと見ることができるであろうが、当然ここで彼は、イギリスの伝統的形態である総合閲覧室制が、一番すぐれたもの⁶⁷⁾として来た考え、すなわちその卓越性はもはや維持できない段階に到達したことを率直に認めている。勿論彼はいま直ちにアメリカのような形態を採るべきであると主張している訳ではないが、ムンテが「これは金のかかる姿勢だ」と評していると同じように、ジャストもまた「経済的負担の大きい形態」であると述べている点は、ヨーロッパ人に共通した感想として聞くことができる。しかしながら他面セアーズ(W. C. Berwick Sayers)は「金がかかるという点では、たしかにその通りではあるが、結局はライブラリー・エコノミーである」とのべ、「魅力ある理論だ」とも記している⁶⁸⁾。しかしながらヨーロッパ人にとっては、なおまだ騒々しい貸出室と、静寂な閲覧室という対照的な観念がつきまとって、この2つのものを、ある一つの主題下に置くというアメリカ的な考え方には依然としてある種の抵抗があることも看取される。ムンテはヨーロッパのそれには、「古い伝統」という言葉をあてているが、一方ではまたそれぞれの主題によって異った沢山の閲覧室に分割され、そこに人々が入りこんでいる情景を見て、これは規模の大きな牧場における長い列の飼菜桶をわれわれに思い起させるし、集中的であることを必要とする精神作業のためには、どうも好ましいものではない⁶⁹⁾、と述べている。このことは、彼が終始アメリカ的なものに対してすこぶる批判的であったためと解するよりは、矢張りヨーロッパ人のこの制度に対する

65) Munthe, Wilhelm : *Ibid.* p. 34.

66) Jast, Stanley L. : *The Planning of a Great Library*. Lond., Libraco, 1927.

67) Brown, James Duff : *Manual of Library Economy*, 6th ed., by W. C. Berwick Sayers. Lond., Grafton, 1950. p. 126.

68) Munthe, Wilhelm : *Ibid.* p. 32.

69) 拙稿「図書館学教育の諸類型」京都大学教育学部紀要Ⅵ 1960年12月 p. 161.

率直な感想を示すものと見るべきであろう。

同じく完全主題別部門制図書館と呼ばれるものの中に在っても、ボールティモ어의それが、この制度の権化であるとまでいわれ、世界的にその名声を馳せている理由は、いうまでもなくこれがオープン・プランという建築様式をもとに内部配置を見事に実現しているために外ならない。このようにオープン式主題別図書館が新しく現われて来ることによって、この制度は更に有力な特長を加えて、次の発展段階に到達して行ったと見ることができる。このオープン・プランの特徴としてギゼンスは、(1)デスク・閲覧室・書架をもつメイン・フロアが、銀行の部屋更らには百貨店のように、できる限り実用向きの一つの大きなオープン・スペースから成っていること、(2)このオープン・スペースには街路から真直ぐに入って行けること、(3)オープン・スペースの下が書庫⁷⁰⁾になっていること、の3つを挙げているが、同時にこれは次のような自明のこと (ostulates) に基づく理論 (theorem) を展開したものだということもできよう、と記している。それは(1)メイン・フロアの空間は非常に貴重である。従ってこれを無駄に使用してはならない、(2)メイン・フロアの照明は閲覧者にとって非常に貴重である、従ってこれを囲む壁は書架でもって封鎖してはならない、(3)暗いということは別に書物に損害を与える訳ではなく、逆に日光特にその強いものは非常に有害である。従って書物は窓の無い部屋の中で、最善の状態をもって保管され得る、(4)書庫の窓は電燈に較べると効果が少い。それは通路の場所や、ほんの短い距離だけに役立つぐらいである。従ってそれは光の素として設ける程度でよい、(5)書庫の窓は、温度と湿度とを適度に調節することを困難にし、換気のためにも役立たない。却って階段や隣室間の透間口の方がそのためには効果的である。従って換気の素という程度に設ければよい、(6)貸出台・参考事務用デスクに対しては書架が近接していることが望ましい。真下に書庫がある以上に場所的には近く、便利なところはない、(7)空間の無駄づかいは間違ったことである。必要のない廊下・通路・玄関や、建築的にいって美しいとかいったこと、こうしたものは、スペースを驚くほど浪費に導くものであり、従って除去されねばならない、という7つの事項であった。

このオープン・プランの起源は、勿論厳密にいった場合確実にこれを⁷¹⁾知ることはできないが、書庫を閲覧室の下に設けた最初のものは、ギゼンス (1876—) と1917年以来、15年間 (1932年まで) 共同で設計業務に携ったティルトン (Edward Lippincott Tilton, 1861-1933) が、ボールティモ어의ものに先立つ20年ほど前に、スプリングフィールド (Springfield, Mass.) の市立図書館を設計した際のものであったとされている。勿論書庫を閲覧室の下におくという構造は、その後サマビル (Somerville, Mass.)、ウィルミントン (Wilmington)、ハイランド・パーク (Highland Park, Mich.) などの図書館においても行われたが、ボルティモ어의それは、その中でも最も規模が大きく、図書館建築の発展から見るとそれが一応辿りついた極点 (culmtiation) としてのオープン・プランが、遺憾なく表現されているのがこの図書館であるとさえ記されている。

70) Githens, Alfred Morton : The Complete Development of the Open Plan in the Enoch Pratt Library at Baltimore. *Library Journal*, Vol. 58, p. 381-385, (May I ; No. 9), 1933.

71) *Library Journal*, Vol. 58, No. 9, (May I), 1933. *Editorials*.

この図書館の一階であるメイン・フロアーは、中央のホールをとりかこんで、レファレンス・ルームと、8つの主題別に分割されているが、この図書館を完成した当時の館長ホーラー（1884—）は、ここの主題別制は、中央ホールから開放的な形を執って構成されているために、階段とか廊下などによって仕切った沢山の部屋で造られているものとは異って、相互の結び付きが非常に密接であり、従ってここにおかれている書物は一つの大きな単位（unit）である⁷²⁾と語っている。そしてすでに規模の大きいアメリカの図書館に対する主題部門化という思想の発展は、クリーブランドやロス・アンゼルスにおいて、効果の大きいことが証明されている以上、もはや疑う余地がないこと、またこの形態は、あらゆる資料、すなわち貸出用・参考用を問わず、製本・未製本雑誌の区別なく、文書類、パンフレット、切り抜きの類にまで及んで、ある主題分野のもとに収集され、しかもその領域のことについて教育され、従ってまたそれに関する文献に精通している選ばれた小グループによって、援助されることによって市民に対するよりすぐれた奉仕が期待出来るという明白な事実の上に立脚しているものだと付言している。

8

ボルティモアの図書館においては、ホーラーもいっているように、そのメイン・フロアーは、全面的にこれを成人閲覧者（adult readers）に対する奉仕場所として提供されている⁷³⁾。従ってオープン・プラン形態を、主題別閲覧制の発展からながめると、単に主題別の資料、主題専門家（subject expert）、そしてあるはっきりとした主題を持ち、それについて緊急な解決を必要としている参考閲覧者（reference reader）との3つが、それぞれの主題部門において密接に結びついたものから更にこれは発展して、成人の参考閲覧者に対する特別の配慮、その優先的な措置を図るものとなっている。同時にまた参考閲覧者のうち、そのもつ問題解決に一刻を争うような形で来館する人々と、時間的には比較的余裕をもって調査研究を目指す人々とは、自然その取扱の上に相違が現われる。特別文庫、美術、メリーランド地方史料の3部門と、ブラウジング・ルームの4つは2階におかれ、1階の中でも、そうした緊急度が強い産業・科学部門を入口に最も近く配置し、これに続けて実業・経済、社会科学・市政資料・教育・哲学・宗教などの部門をおいている形も、上述の事情をそのまま反映するものである。またこのオープン・プランには、これを特徴付ける要素の1つとして、オープン・スペースの階床には街路から真直ぐにそのまま入って行くことができるという条件が掲げられており、具体的にいえば、その図書館は街路上に位置し、玄関入口はそれと同じ高さ、すなわちストリート・レベルあるいはサイドウォーク・ラインを執る建築様式だとしていることも、速急な解決を望む人々への顧慮に基づくものである。

以上のように、主題別部門制が今日までに辿りついた最も新しい形としてのオープン・プラン

72) McCauley, Pauline M. & Wheeler, Joseph L. : Baltimore's New Public Library Building. *Library Journal*, Vol. 58, P. 386-393, (May I ; No. 9), 1933.

73) *Ibid.* p. 387.

様式は成人参考閲覧者、参考質問(reference questions)の緊急性を基にした発展形態としてこれを理解することができるであろうが、このような原則に立つ制度にあっては、主題部門の構成と、その主題選定という面においても、新しい課題が付きまってくる。先ず地域社会の実情が異なることによって、それぞれの図書館に持ちこまれて来る主題に、性格的な地域差が当然生まれて来ること、次には、こうした人々の望む部門別分化の形態は、必ずしも、デュイの分類表における主類表の構成とは一致しないということである。その結果現実的には、主題部門の分け方が、各館によって非常に違ったものとなっており、結局はその間に統一というべきものはほとんど見られないばかりでなく、この国の標準分類表である D. C. の構造に対しては、至って自由な態度がとられている結果を示している。マックディアミドが、主題別部門制は、現存の閲覧形態中では特に規模の大きい図書館にとって、最も満足すべきものであるとし、建築条件がそれを許す限り、この制度を採用すべきであると述べ、同時に新しいタイプの主題部門化を試みて行くべきだとしているのは、以上のような一般情勢をその背景としたものであろう。彼はそれを「図書館の分類表よりはむしろ、地域社会の主たる関心と活動との領域を基盤にしたもの」という表現を用いている。この言葉は、今次大戦の始まる直前の 1940 年頃、ワシントン D. C. に新しく中央図書館を建設するという計画が進められ、その際採用が予定され、「主題別方式の一変形」として注目もされて、館界の関心を集めたものを直接には意識してなされたものである。この新館は、先ず大きく一般参考および相談部と公共奉仕および地方史部に分けられ、前者には、通俗集書、レファレンス・インフォメーション、家庭関係図書、時事問題という 4 つの小部門を、後者には公共行政、市政参考資料、ワシントン D. C. 関係文献、職業関係資料の同じく 4 個の小部門をそれぞれ包含させる構想であった。その場所もペンシルバニア通り 499 番地を予定したものであったが、結局この新館は実現を見ず、ここに建てられたものは現在合同庁舎の形で使用されており、図書館の管理部 (Administrative Offices) に該当するもののみが、ここには移されている。⁷⁵⁾従ってこれは構想そのものに終わってしまったにすぎないが、こうした部門構成は、図書館分類法のような論理的な表の中に、主題資料を分割するものとははるかに異ったものであって、特殊な関心領域を極端な形で構成したものというべきである。しかも当時においては、主題別部門制に対する新しいアプローチと考えられて、その成果に対し、非常に大きな期待の寄せられたものであった。このような形のなかでは、すでに主題別という概念は失われて、利用者の関心部門別へとそれが変異を遂げてしまっている姿が見られる。

74) McDiarmid, E. W. & McDiarmid, John : *Ibid.* p. 83.

75) 現在の中央館 (8th and K St., N. W.) は 1903 年の開館で、1950 年に全面的に内部配置を再編成し、次のような部門化を実施している。Gen. Reference & Info. Svc., Washingtoniana, Technology & Science, Business & Economics, Hist. & Gov't. & Geog., Biography, Literature & Foreign Lang., Fiction, Sociology & Education, Phil. & Psych. & Religion, Art, Music, Young Adult, Children's Room, Circulation.

Peterson, Harry N. : D. C. Reorganizes Divisions, *Library Journal*, Vol. 75, p. 78-81, 92, 143-146, 1950.

各館における主題部門の選び方が、それぞれに任意的であることは、この制度の完全な形態を最初にとったクリーブランドと、1959年の新館完成と共に、多年念願して来たこの方式を採用したニュー・オルリアンズ（New Orleans, Louisiana）公共図書館の2つを比較するだけでも、その一端を知ることができる。前者が、逐次刊行物、文学、通俗書、レファレンス部、哲学（心理・宗教を含む）、社会科学、技術（商業を含む）、歴史（伝記・地誌を含む）、特許資料、民俗（東洋を含む）、児童の合計12部門から成るのに対して、後者は実業と科学、ルイジアナ州史料、一般サービス部、芸術と音楽、児童および青少年の5部門であり、両者の間には一つとして同一のものは見出し得ない。更らにまた1954年同じく新建築を完成して、主題別部門化を標ぼうしているサン・ジャゴ（San Diego, Calif.）公共図書館のメイン・フロアーは、歴史・世界事情、文学・語学、科学・産業の3大部門によって構成されているが、ここで用いられている主題用語は、図書分類に際して適用される概念とは全く違ったものである。すなわち、語学・文学の部門中には、教育、宗教、文学、外国語、小説、青年図書（高校生以上）などが包含されているといった実情であり、主題別部門制の実態も、またその制度の下に分化されている蔵書の内容も、それぞれに異った性格を、いよいよ大きくしつつあるといつてよい。

9

図書館の歴史を考察して、デュイによる十進分類法の創案、当然それに伴う相対的配架法への転換という事実を時代区分の重大な要素と見、それ以前を図書館中世期（Library Middle Ages）と呼んでいるものさえある。⁷⁶⁾ 要するにそれ以前は、図書の蔵置形態が固定的配架によって貫ぬかれていた時代であり、図書の位置が不変であることによって、その確認は常時容易であったし正しくそれはデュイのいうように、10年経った後においても、暗やみの中でさえ、探し当てることのできるものであった。⁷⁷⁾ このような時代では、書物の蔵置、またその分化形態も、すべて偶発的な条件によって支配された。しかしながらその蔵置の形態を支配していたものが、書物に固有な本質的要素にすり変えられたことによって、書物の所在は不斷に移動するものに变化して来た。またある主題のもとに、これを分割するという操作も、至って簡単に行われるようになったのである。主題別部門制は、発展的には開架制につぐ次の段階で捉えられるものであるが、開架制の精神が、市民の図書館利用の権利に根ざした効果的な体制を準備することに発している以上、主題別部門制の方は更らに進んで、利用者の主要な関心に応える形で改変して行った主題別の開架制のとしてこれを理解することが出来る。しかしこのような発展は、デュイによって打ち樹てられた図書群の主題構成とは、著しく背馳するような事態もすでに顕著に現われており、これらの関係をめぐっての新しい課題が、今後の発展の上に、重大な問題を提起する段階に到達せしめていると見なければならない。

76) *Library Journal*, Vol. 58, No. 9, May 1, 1933, Editorials.

77) Dawe, Grosvenor: *Ibid.*, p. 174.

わが国においては、開架制の普及自体もいわば戦後のものであり、従って主題別部門制は、全くその播らん期にあるということができる。この稿はそうしたきわめて重要な段階にあることを考えながら、これを図書館資料の蔵置ならびに分化形態の上で、そのもつ意義を、特に歴史的な観点から考さつしようと試みたものである。その結果、このような歴史的変遷の中には幾多重要な示唆が蔵せられているのを看取することができた。そのうち特にわれわれの注意を強く引く事実、図書館資料の蔵置形態を支配し、その分化現象に対して主導的な要因をなすものは、もはや従前における図書分類の原則ではなくて、図書館を利用する人々の関心内容によって、それが規制されて来つつあるということである。そしてこのことは、わが国における図書館活動の現状について、きびしい一つの批判を含んでいるものといっても決して過言ではないであろう。図書館の備えるべき蔵書の内容的性格を規制し、それ故に図書館機能の根源をなし、蔵書構成の第一段階に位置する図書選択の思想的理念が、欧米においては1890年代を境として、それ以前には支配的であった価値理論 (value theory) から要求理論 (demand theory) へと移行し⁷⁸⁾、今日ではそれもすでに70年以上を経過したことになる。そしてこのような要求理論が根ざしているところは、言うまでもなく図書館を利用する人々のもつ関心に外ならない。従ってそのような関心の実態を把握することが、特に公共図書館においては、最も重要な課題とされて来てもすでに久しい。図書館資料の蔵置形態が次第にこのような関心部門への分化をたどるようになった起源も、恐らく上述の要求理論が出現した時代にたどってこれを求めることができるであろう。わが国図書館活動の今後に対し、至大の関係をもつものとして、以上のような歴史的事実の重視と、利用者の関心部門に基ばんをおいた方策とが要請されていることを、特に強く感ずるものである。

78) Munthe, Wilhelm : *Ibid.* p. 56.